慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	訂正
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.9 (1966. 9)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660901-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

のこの時期に対する総合的著述は概説的ながらすぐれた意義があるものと考える。

チェンバーズ教授は、現在ノッティンガム大学の名誉教授で、主著に地方史研究の嚆矢「Nottinghamshire in the Eighteenth Century (1932)」がある。

本書『世界の工場』(原名「The Workshop of the World」)は、元来イギリス経済史の概説書としてシリーズで刊行されたものの第二巻であって、その第一巻は、T・S・アシュトンの「The Industrial Revolution 1760-1830 (1948)」〔中川敬一郎訳『産業革命』岩波書店〕である。

本書の全体は次の八つの章に構成される。

第一章序説、第二章機械制工業と運輸業の発達、第三章農業と穀物法、第四章外国貿易と財政政策、第五章銀行業、信用、株式企業、第六章恐慌の年、第七章人口と都市の発達、第八章「産業国家」における労働者。

第一章で、イギリスが海運・信用業を通じて世界商業を支配していたこと、及びこの時期の全体的位置づけを述べている。

第二章はいわば工業の発展の全体的展望である。繊維工業を中心とした発達と、商業の拡大を支えた鉄道及び海運の発達を連関させてとらえている。

第三章では、一八七三年、七五年、七九年の不作によって「穀作借地農の密月の終り」が訪れるが、世紀中葉から着実な農業生産の発展があったことが述べられる。

第四章では、イギリス資本主義の発展に伴う海外市場の拡大を考察し、つづく第五・六章は第四章をうけて一八二〇—八〇年の時期にほぼ十年毎に起きた恐慌と、その間の熱狂的な投機や設備投資の過程を、海外貿易、資本市場、財政政策などを含めて総合的に追っている。教授が、イギリスが厳然として「世界の工場」であったことを認めながらも、外国貿易構造が依拠する「物的基礎」は「比較的脆弱な」ものであったのではないかと論じ、「世界の工場」の覇権は、金融・国際信用などを含めた総合的なものであったと論じているのは興味深い。

第七章は、産業化と人口のパラレルな発展によってよびおこされた論争をふまえて人口の問題を論じ、第八章では同じく産業化の過程での労働者階級の状態を検討している。

概説書であるが故に、充分詳細な議論ではもちろんないにしても、多角的に一八二〇年代以降のイギリス資本主義の姿を浮き彫りにしたすぐれた著述といえよう。

ただ、序説にいう「離陸」期の構造的解明や、なぜ「大不況」がこれまでの恐慌と違う長期性を有するようになったのかなどの指摘が欲しかったとは言える。全体に、すぐれた豊富で適切なデータで議論をすすめられているという点からみても、是非この点の考察をされたかった。しかし、これは概説書の範囲ではないのかもしれない。(岩波書店・昭和四一年三月刊・B6・二六七頁・五〇〇円)

—栗本慎一郎—

訂　正(本学会雑誌　第五十九巻第八号)

(七四頁上段　一・二　第二パラグラフ)

「……時間にのみ依存しており、技術進歩そのものは……」

を改めて

「技術進歩そのものは、時間にのみ依存しており……」

とする。

(七四頁上段　最終行)

「技術進歩率」→「技術進歩」

(七七頁上段　第一行)

「tについて積分すると……」

を改めて

「vについて積分すると……」

にする。

(八一頁下段　一〇行目)

「$s=\rho(0)\dfrac{1}{g+\delta}$」

を改めて

「$=\rho(0)\dfrac{1}{g+\delta}$」

とする。sは不要。

(八二頁上段　八行目)

「$\rho_0(t)=\rho(t-v)=\rho(0)e^{-(t-v)}$」

を改めて

「$\rho_0(t)=\rho(t-v)=\rho(0)e^{-\delta(t-v)}$」

とする。